

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

6月18日の大阪北部地震の被災から、まだ立ち直ることもできないうちに、今度は7月7日から8日にかけての西日本豪雨災害。広範囲の地域に及んだこれらの災害で、被災された方々およびそのご家族の方々に、心よりお見舞い申し上げます。今号最後に「西日本豪雨災害募金」のお知らせをしております。どうぞよろしく願いいたします。

今号は、特定NPO法人カリタス釜石が現在行っている活動の様子、震災当初から亘理教会に関わり、教会改修工事の支援もして下さった東京大司教区の田園調布教会の方々が亘理教会を訪問された様子、福島県檜葉町に修道院を開設し、2015年11月から檜葉に住み、少しずつ地道に活動しておられる聖母訪問会の様子、さらに、亘理町の災害公営住宅などに住む人々が、保育園児と共に、七夕飾りを作って楽しんだオリーブの会の活動についてご紹介します。

釜石のいま —被災者に風化はない

特定非営利活動法人カリタス釜石 渡辺 良子

震災から7年が経過し、釜石市では街の整備も整いつつあります。復興公営住宅は、ほぼ全棟完成。自力再建した真新しい我が家を眺めながら「これからまだまだ頑張らないと！」と前向きに進んでおられる方がいる一方、仮設の集約で引っ越しを余儀なくされる方や復興住宅にも入居できずにいる方、復興住宅入居目前で亡くなられた方、自力再建したくてもできずにいる方、様々いらっしゃいます。

ラグビースタジアムや市民ホール、道路の整備など、着々と復興が進む中、気持ちが街の変化についていけない方々もまだまだ大勢いらっしゃいます。

今もなお、全国から多くのボランティアさんがカリタス釜石を訪れ、そんな方々に寄り添い、傾聴活動や見守り活動、サロン活動を続けてくださっています。全く頭が下がる思いです。何年も何年も足を運んでくださっているボランティアの方々は、住民さんの事を詳しく知っておられ、私たち、新人スタッフよりも住民さんとの絆が深く、長期間活動してくださっているボランティアさんのために、住民さんが夕食のおかずを作ってきてくださったりと、ほっこりする場面もしばしばあります。

【なんちゃってお茶会】

【毎月定例のお茶べり広場】



先日もベース内で「なんちゃってお茶会」を催した時、「ありがたくてありがたくて体中に抹茶がしみわたった、ありがと！」と目を潤ませていた住民さんがおられました。逆にこちらもこんなに喜んでいただけ！と。当日は、42人の方がお抹茶を楽しまれ、大盛況でした。他にも、「カリタス釜石のお茶っこが好きで好きで」と90歳を過ぎたおばあちゃんが毎月「お茶べり広場」にいらっしょってお茶を飲みながら、会話を楽しんだり、手芸を楽しんだりと何気ない日常を過ごされています。

また最近では、自身でお料理を作らなくてはいけない方は、料理教室に参加するなど、イベントに参加する住民さんが多くなっているようにも感じます。気持ちを徐々に外に向けられるようになってきたのかなあとも思いますが、一方では、学生さんたちが作ったお菓子を食わずに持ち帰り、仏壇にお供えしてあったというお話もありました。震災から年月が経過し、風化も懸念されますが、被災当事者の風化は無いのだと感じさせられます。

みなさんそれぞれ思い思いのイベントに参加される中で、復興住宅に入居しても集合住宅に馴染めないとか、昔からのご近所さんとは違うため、誰とも会話する事なく1日が過ぎてしまったという声も度々耳にします。孤立しがちな環境を少しでも変えることができればと、スタッフは、様々なイベントを企画し、孤立の防止やコミュニティ作りを力を注いでいます。今やカリタスは、住民さんにとってなくてはならない存在となっています。

【男の料理教室】



大人気だった【寄せ植え講座】



私は事務局におりますので、住民さんと接する機会は、さほど多くはありませんが、それでもベース内でのイベントの際、みなさん帰りに際「今度はいつ開催されるの！！」とカリタスのイベントを楽しみになさっています。「楽しみを持つ」ということはとても大切なことのように思います。

これから夏に向けて学生さんを含む多くのボランティアさんがカリタス釜石を訪れ、更にはぎやかになります。少しでも被災者の方々に心の癒しを感じてもらえることができればと願っております。

私たちがこうして継続的に活動できる背景には、長きにわたりカリタス釜石をご支援くださっているみな様とカリタスジャパンの支えがあります。心より感謝申し上げます。



お楽しみ卓球の参加者の皆さん



人気の手芸教室

田園調布教会の支援と祈りに感謝

カトリック亘理教会 長嶋 治夫

6月23日、カトリック田園調布教会の竹内正美神父様と信徒38人が亘理教会を訪問。

亘理教会と田園調布教会のご縁は、震災直後、「被災地にある教会として被災者支援を」と背中を押し、人・物資の両面から支援・協力をいただき、現在までのそしてこれからも亘理教会が被災者支援活動を

行う、その礎を築いてくれたことです。また、亘理教会の改修工事にあたって多額の献金で支えていただきました。私たちは、亘理教会の改修工事が終わったころから、田園調布教会の皆さまに新しくなった聖堂を見ていただきたいし、そこで共に祈りができたらと望んでいたことが実現しました。そのことに神様の計らいを感じます。

一行が到着、早々に新聖堂を見ていただきました。光の入る明るいデザイン、障子の入った和風ながらモダンな調和に皆さんが「良い聖堂になりましたね」と喜んでくださいました。そして、小野寺洋一神父様によるお祈りが捧げられ、ツアー企画の目的でもある亘理教会との交流会が総勢53人で行われました。



亘理教会聖堂でともに祈りを捧げた皆さん

その中で、田園調布教会の震災支援に関わりの深い3人の方にご挨拶をいただきました。田園調布教会の大震災復興支援プロジェクトチームが震災支援を始めるにあたって、亘理地域を活動拠点とつなげてくださった鹿野裕美様、活動のための宿舎を提供してくださった樋口一弘様、また、樋口さんは大震災復興支援プロジェクトのメンバーと共に亘理教会で被災者320人、支援者120人が集まった「亘理ふれあいマーケット」の推進者で、久しぶりにお会いして当時の話に盛り上がりました。3人目は、亘理教会改修のきっかけにもなった被災者の方が毎月1回亘理教会に集うオリーブの会で、始めから現在に至るまで中心的役割を担ったカトリック八木山教会の野田和雄さんです。野田さんは、田園調布教会から八木山オリーブの会へ着物や折に触れてたくさんのご支援をいただいたことへの感謝とお礼を述べ、そして仙台教区が掲げた「4号線から6号線・45号線へ」の方針のもと、八木山教会にオリーブの会を発足して、亘理の仮設住宅に続けて支援、仮設閉鎖後も復興住宅の孤独に寄り添う歩みが教会で続いていること等を紹介されました。



【写真上】昼食を取りつつ交流される田園調布教会と亘理教会の皆さん

【写真下】亘理教会委員長 長嶋さん(左)、宿舎を提供してくれた樋口さん(右)

交流会の最後に、田園調布教会 教会委員長の高瀬信彦様より、今回のツアーの企画を快く受け入れ、準備した亘理教会への謝辞があり、締めくくりに「田園調布教会と亘理教会は、この絆を大切に互いに助け合い協力していく兄弟教会になりましょう」との嬉しいお話があり感動、和気あいあいの楽しい交流会でした。記念写真を撮って笑顔でお別れ、田園調布教会の皆さんは、次の訪問地原町教会へと亘理教会をあとにしました。

今回の被災地巡礼ツアーを企画し実施にご尽力いただいた田園調布教会福祉部の今泉立人様、関戸順子様、安達信様に心より感謝申し上げます。



「こころ、つなぐ、ならば、明日へ!!」

聖母訪問会 檜葉修道院 Sr. 藤原 てる

「こころ、つなぐ、ならば、明日へ!!」という言葉は、檜葉町役場の壁に書かれている「標語」である。檜葉町は、2015年9月5日の全町避難指示解除から2年8か月が経過し、今年3月末をもって仮設住宅無償提供が終了した。

昨年、住民の魂を入れた町おこしをしようと「まちづくりワークショップ」が5回開催され、檜葉町の過去・現在・未来について話し合われた。未だに田畑の多くは荒れ地のままで、汚染土を入れたフレコンバックが積まれているが、復興事業は着々と進み、家の解体、ビル、アパートの新築、新しい道が造られ、町の原風景が変えられていく。

檜葉町は、町民と町内事業者の暮らしを再生し、また新たな居住を促進するための復興拠点の整備を進めており、その中心が「笑ふるタウンならば」である。「笑ふるタウンならば」は、檜葉町役場近くの田畑を開拓して整備され、120世帯分の災害公営住宅や福島県立大野病院附属ふたば復興診療所(2016年2月開設)や同敷地内に蒲生歯科医院(2016年7月診療再開)がある。この災害公営住宅には、定年退職後の高齢者が多く入居し、子どものいる家族は2世帯のみ。家族が分断され、若い働き盛りの人の多くは、現在も檜葉町以外に住んでいる。



檜葉町の災害公営住宅 役場によると空きもあるとのこと

今年7月の檜葉町の広報誌によると、3,343人（2018年5月31日現在）が帰還しているが、その多くは高齢者であり、そのためもあってか毎朝8時25分に有線放送で「今日も元気に頑張りましょう！」と子どもの呼びかけでラジオ体操が町中に流されている。また、今年5月19日、屋外で初めてとなる檜葉南・北小学校と中学校合同運動会が開催され、青空の下、101人の児童・生徒や町民が運動会を楽しみ、歓声がこだました。

2018年5月31日現在、町内居住者のうち、老年人口（65歳以上）の割合が約39%となっており、町では高齢者向けの催しや支援がさまざまな形で行われている。

昨年7月から檜葉町保健福祉会館で、高齢者の介護予防支援のリハビリが行われ、また「あおぞらこども園」では施設の一部を利用し、火曜日、金曜日午前10時から午後2時まで、約30人の高齢者が、自分たちで作った昼食を食べながら、だんらんのひとときを過ごし、支え合っている。

さらに、震災後、閉校になった檜葉南小学校を「檜葉まなび館」として活用し、月曜日から金曜日に、グループ活動（和太鼓、手芸、創作かかし、ぞうり作り、木工、藍染めなど）が活発に行われている。

今年の6月19日より、「町民一人ひとりが先生になる」を基本姿勢に、「檜葉市民大学」が開講され、高齢者の生きがいへとつながっている。講座内容は、教養講座、専門講座、公開講座に分かれており、月1回～2回開講される講座がほとんどで、参加者が重荷にならないように配慮されている。参加者は農業、スポーツ、音楽、歴史、中国語、落語などの講座を楽しみ、そこから生きがいを感じているようだ。

今年6月26日、「笑ふるタウンならば」内のふたば復興診療所に隣接した国道6号線沿いの34ヘクタールの敷地に、商業施設「ここなら笑店街」が開業した。鉄骨平屋建て約3,300㎡の商業施設には、ホームセンター、スーパー、食堂など地元経営者による10店舗がある。外には喫茶コーナーが設けられ、ベンチの置かれたくつろぎの空間もある。そこで、仮設住宅の「お茶っこ」で親しくなった女性と再会した。「あら！お久しぶり！『みんなの交流館（7月30日、タウン内に開館）』でまたお茶っこしようね！」と喜び合った。

7月28日には、福島復興のシンボルとして、Jヴィレッジの一部が再始動し、アスリート、サッカー、観光、ビジネスの利用にゆとりとくつろぎを提供する。また、来年4月に、JR常磐線の広野～木戸（檜葉町）間のJヴィレッジに近い檜葉町大字山田岡字下岩沢に、イベント時のみ利用出来る新駅「Jヴィレッジ駅」（仮称）が開設される予定。さらに、檜葉町大谷の総合グラウンド内には檜葉町屋内体育施設が新築中である。



「みんなの交流館ならば CANvas」



「ここなら笑店街」



（写真左）県立ふたば復興診療所（内科、整形外科）

檜葉町の医療機関は、全3機関（2018年7月現在）
上記の他、内科小児科クリニックと歯科医院がそれぞれ1つつある



（写真右）檜葉町お買い物バス

商業施設「ここなら笑店街」オープンに合わせ、6月から毎週木・金曜日に運行
各地区の集会所などを巡回し、誰でも無料で乗車でき、添乗員も同乗している



①藍染会の活動風景 ②毎月、月命日に被災者のための祈りをささげている
③町民とともにリハビリ運動 ④グループ活動が活発に行われている「檜葉まなび館」

現在の檜葉町は、町内居住者が住民基本台帳人口の約50%ほどであり、特に若い人々の帰還が進んでいない状況ではあるが、新たな取り組みや商店街をはじめとした施設建設など、復興へ向けて少しずつ前へと歩みを進めている。その中で、私たちは、次の3つのことを大切にしながら檜葉町民として生活している。

①放射能汚染によって傷んだ地に住み、「神・人・自然との和解」を願いながら日々祈ること。

お借りしている小さな畑や庭で土と親しみ、すべての「いのち」の営みが健やかであるようにと、毎日、作物や草花に声かけをしている。同時に、檜葉町民として、出来るだけ地域の呼びかけにこたえることを望んでいる。

現在、一般社団法人「ならばみらい」の呼びかけで、「藍染会」に入り、藍の栽培・収穫・染色の喜びを体験している。また、仮設住宅で出会ったご近所の老夫婦、災害公営住宅や自宅で独り暮らしをしている90代のご婦人、災害公営住宅で認知症の夫と生活しているご婦人など、何らかのご縁があって関わり、親しくなった方々を訪問し、交わりながら小さな手助けをしている。

また、7月30日、「笑ふるタウンならば」敷地内に「みんなの交流館 ならば CANvas」がオープンすることから、そこで、より多くの人々に出会い、親しくなることを楽しみにしている。

②いわき教会に所属し、主任司祭・信徒と協力し合いながら司牧活動に参加すること。

今年3月に仮設住宅が閉所されたのを機に、大熊の住民が入居されているいわき市「北好間」と「鹿島」の復興公営住宅の団地を月1回訪問しているさいたま教区の信徒、いわき教会の信徒と一緒に「出前カフェ」に参加し、よもやま話を聞きながら、だんらんのひとときを過ごしている。

③「いわき宗教者の集い（キリスト教・仏教）」に参加し、諸問題を学び・分かち合い、平和を願って共に祈ること。

東日本大震災の月命日には、大楽院（真言宗豊山派）の朝6時のお勤めに参加し、住職の読経に心を合わせて被災者のための祈りをささげている。

私たちが檜葉町の住民になったのは、被災地でのボランティア活動をすることが主目的ではないため、これからも檜葉町で上記のことを大切にして、奉獻生活をしたいと思う。

2度目の保育園児との交流会

カトリック八木山教会 オリーブの会 野田 和雄

6月27日、オリーブの会は、津波被災者のみなさんと地元巨理カトリック保育園との2度目の交流会を催しました。保育園児との交流会は、オリーブの会と保育園の打合せの上で、年長さん11名と園長先生や指導の保育士さん、マリアの宣教者フランシスコ会(FMM)のシスターがサポートして実現しました。みなさん、自分の孫のような子どもたちとゲームや七夕飾りを作るのを楽しみにしています。

園児の入場を手拍子で迎える人々は、皆、笑顔で子どもたちを見守っています。聖堂に入った子どもたちは、まず祭壇にむかってお祈りしました。それに合わせて大人たちも手を合わせて祈りの言葉に耳を傾けています。



祭壇にむかってお祈り後、自己紹介をする子どもたち

祈りが終わると、園児が一人ずつ自分の名前を言ってから「よろしくお願ひします」と言うと、拍手がおこりました。元気のいい子、恥ずかしそうな子、先生の助けをを求める子と様々です。気になる子は、元幼稚園の先生だったボランティアがサポートします。

園児・先生13名、参加者15名、オリーブの会12名が、テーブルごとに分かれて、袋やくさりといった七夕飾りを色とりどりの折り紙で作っていきます。

大人たちと園児が仲良く、「こうしたらきれいに作れるよ」「できた!」と楽しそうな声があちらこちらで上がります。40名の老若男女が入り交じり、次々と七夕飾りが出来上がっていきます。ニコラウス・コンディ神父(ニコ神父)も楽しそうに飾りを付けています。



子どもたちと七夕の歌を歌い、短冊に願ひを書きます。「いつまでも元気で」「大好きだよ」うまく書けない子には、おばあちゃんが手を貸しています。子どもの「できた」という笑顔に元気をもらっているようです。

七夕飾りを持って帰る子どもは、皆、うれしそうで、参加者やボランティアもこれを見て、笑顔で見送っています。

台所では、七夕にふさわしいちらし寿司や山菜のおかずが出来上がっています。食事の準備のためにテーブルを出し、祭壇をしまっています。お皿や汁椀が並ぶと、食前の祈りをニコ神父にお願いします。被災者の皆さんも祈りがすっかり定着しています。

皆さん、子どもたちに元気をもらっておいしい食事に満足そうです。恒例の食後の歌で盛り上がり、次回の予定を確認して解散します。

スタッフの分かち合いでは、皆さんが子どもたちとの交流と食事で元気になったと感想を述べました。すっかり巨理教会主体となったオリーブの会は、教会協働の歩みを続けていきます。



園児たちと楽しく七夕飾り作り☆



西日本豪雨災害募金のお願い

2018年7月7日から8日にかけて、西日本を中心に広い範囲で大変な被害をもたらした西日本豪雨災害により、亡くなられた方、被害に遭われた方々へ心よりお見舞いを申し上げます。

カリタスジャパンは、この西日本豪雨災害による被災者の救援活動を行っていくため、救援募金の受付を開始しています。また、特に甚大な被害が発生しましたカトリック広島教区では、教区内の被災された信者・教会施設への支援のための募金を始めています。※高松教区については、カリタスジャパンから必要に応じて高松教区サポートセンターに救援金として援助金を提供する運びとなっています。

皆様のお気持ちを寄せていただきますようお願いいたします。

◇カリタスジャパン～災害救援のための募金～

(被災地の教区と連携して推進する救援活動のために活用されます。)

・募金受付口座

郵便振替口座番号：00170-5-95979

加入者名：カトリック中央協議会カリタスジャパン

※通信欄に、「西日本豪雨災害」とご明記ください。

◇広島司教区～教区内の被災された信者・教会施設のための募金～

(広島教区内の被災された信者・教会施設への支援のために用いられます。)

・受付期間：11月末日まで

・募金受付口座

郵便振替口座番号：01310-0-16760

加入者名：カトリック広島司教区

※通信欄に「西日本豪雨災害支援」とご明記ください。

●各教区の動き(2018年7月22日時点)

カトリック広島教区：広島教区災害サポートセンターを中心に、「岡山・倉敷」、「笠岡・福山・尾道・三原」、「東広島・熊野・坂・呉・祇園・幟町」の3地区に分け、それぞれの被害状況の把握と現場からのニーズの調査を始めています。

カトリック高松教区：高松教区サポートセンターを中心に、教区として西予市社会福祉協議会のもと野村地区の救援に携わること考えています。宇和島駅近くに愛媛地区の「救援ボランティアセンター」を開設し、宇和島教会のもと7月下旬から運用します。